2023年1月22日（日）
防災とボランティアのつどい
主催：内閣府

“YMCAネットワーク”による関東大震災当時の救護活動

（資料提供）YMCA史学会理事長　齊藤　實氏

制作：公益財団法人東京YMCA
業務執行理事　秋田正人

YMCA
みつかる。
つながる。
よくなっていく。

震災前史　ー　全ては備えられていた

日時		出典	できごと
1880年	5月4日		東京YMCA　設立
1882年	6月4日		大阪YMCA　設立
1884年	10月18日		横浜YMCA　設立
1885年	6月		明治大洪水（大阪　淀川）　大阪YMCA救済活動
1886年	5月8日		神戸YMCA　設立
1891年		①	東京YMCA　日本初の人事相談（職業紹介）開始
	10月		濃尾地震　神戸YMCA救済活動
1910年	8月	①	関東地方　大水害
			テントを張り、食料品を給与し、慰問隊を組織して慰問に努めた
			物品　60440點　／　米　99石　（雑誌「開拓者」）
1915年			賀川豊彦氏　『貧民心理之研究』出版
1917年	3月30日	⑦	東大YMCA　無料診療所開設を決定　→　（社福）賛育会へ
	10月	①	体育館新築・講堂改修　竣工　北米Y　9万円／寄附　53,000円
1918年		①	東大YMCA　簡易法律相談所
	12月	①	東大YMCA　家庭購買組合
1919年			興望館　活動開始
	12月7日	⑦	江東支部（亀戸）　（3年で閉鎖）
			工場の青年への英語教育、講演、社交、工業青年の向上を図る
1920年	10月		賀川豊彦氏　自伝的小説『死線を越えて』を出版、100万部超
1921年		②	賀川豊彦氏　神戸購買組合と灘購買組合の創設
1922年	8月1日	①	日光中禅寺湖畔で組織キャンプを実施（9泊10日）
1923年	夏		山中湖キャンプ

前史エピソード：明治大洪水

（２）　日本のＹＭＣＡが直面した初の天災への対処

それは、「明治 18 年淀川洪水」とも「明治大洪水」とも呼ばれる災害への大阪ＹＭＣＡによる施療事業でした。1885 年 6 月中旬から 7 月上旬にかけて、二つの低気圧による降雨が大阪を襲い、淀川左岸の決壊によって河内平野一帯を水に浸した災害でした。31 橋が流失、死者 293 人、被害家屋 1 万数千戸といわれています。浸水面積は約 15, 142 ヘクタール、浸水は最大 4 メートルであったと言います。

「大阪基督教徒青年会」は、この大洪水が起きるわずか 3 年前の 1882 年 6 月 4 日に、北区の天満教会で発会式を挙げたばかりでした。26 歳の宮川經輝牧師を会長に挙げていたこの大阪ＹＭＣＡは、すぐに行動を起こしました。**『施療事業を起こすために協議会を開き、災害の中心地に施療施薬所を開』**いたのでした。

1969 年に世良田元（せらた・はじめ）主事が著した『大阪ＹＭＣＡ史』は次のように記しました。**『これは日本におけるこの種の事業の最初のものであって、以来、大阪ＹＭＣＡは災害に対する救済事業に伝統的にかつ敏速適切に行動することを本領とすることになった』**と。「ＹＭＣＡ会員の本気度の規準」に叶う活躍でした。　「YMCA史学会　会報No.81」

齊藤　実（YMCA史学会理事長）

震災直後　概要　ー　日常がつながっていく

日時	出典	できごと
1923年　9月1日　11:58	①	関東大震災
18:00		「職員一同は体育館内に罹災民を収容し救護に努めた」（日本YMCA史） 猛火に包まれ、避難民と共に宮城前の広場に逃れ、飲料水、供給食料品の配給をなす。
9月2日　朝	①	会館焼跡に20名の職員会をひらき今後の方針につき協議した
		①区内の屍体取片づけ　②飲料水の提供　③牛乳の配給（近県から購入）
9月3日	①	須田町その他にテント張りの救護所を設けて組織的な救護活動にあたった
		救護事業本部（東京YMCA焼跡）委員長長尾半平
9月2日出港	①	神戸市基督教連盟　臨時座長として賀川豊彦氏　東京へ（山城丸　9月5日着）
9月3日出港		神戸市基督教連盟　第2便　慰問品の運搬　（備後丸）
9月5日	①	総務部、天幕部、配給品部、宗教部、収容部、避難民輸送部、教育部　参加者　320名以上
9月8日	⑤	大阪Y総主事佐嶋啓助等救援隊　到着
		電気　復旧
	①	３階柔道室に職員合宿室を仮設（10月末まで）
	⑤	市電　復旧
	①	○配給品部　主に関西方面から物資金品を募集して罹災民に配給
	①	○輸送部　通信省や郵船会社の許可と後援の下に、芝浦から海上輸送
	①	○収容部　焼残りのビルや天幕など1,250名収容
9月14日	⑤	基督教震災救護団　結成　（日曜学校協会・婦人矯風会・東京教役者会等）東京Y　体育館
9月26日	⑤	震災後初の理事会で、今後の展開について協議
10月16日	⑤	市営バス運転手養成のため、目黒に自動車教習所をひらき200名の運転手を臨時養成
10月19日	④	本所基督教産業青年会　天幕で活動開始
	②	賀川豊彦氏　松倉町で活動開始
		宗教部、教育部、調査部、社会事業部、無料診療所・児童健康相談所、牛乳配給所、 児童栄養食給与、体育部、低利事業資金貸金、組合事業部
11月5日	⑤	日本YMCA同盟　復興部設立（東京YMCAの事業も移行）
11月10日	④	本所基督教産業青年会（本所産業YMCA）　バラックで活動開始

関東大震災　当日（東京）

「『9月1日、大震災が起こるや、職員一同は体育館に罹災民を収容し救護に努めたが、午後6時に至り、遂に本館・体育館も猛火に包まれてしまった。一同は避難民と共に宮城前の広場に逃れ、そこにて飲料水・供給食料品の配給をなし、翌朝会館の焼け跡に20名の職員会をひらき今後の方針に付き協議した。』(救護事業日誌の第1頁より）－中略－

第1に着手したのは、区内の屍体取片付け、第2は飲料水の供給、また近県から購入した牛乳の配給など、3日目は須田町その他にテント張りの救護所を設けて組織的な救護事業にあたった。横浜YMCAの建物も3階まで燃えぬけたが、辛うじてテント張り救護所なども大活動を始めた。

同盟会館や東大YMCA会館ももちろん大被害を受けた。名古屋や京阪神・仙台の各YMCAからも直ぐに救援隊が派遣されてきた。救護事業本部が東京YMCA焼け跡に設けられ、長尾半平を委員長としてたちまち救護組織が整った。

「日本YMCA史」

関東大震災　翌日（神戸）

「当時神戸市基督教連盟（神戸市内各教会とキリスト教主義団体など）の傘下に加えられていたYMCAは、震災翌日の二日に下山手青年会館図書室に、連盟加盟団体の代表者60名を集め、賀川豊彦を臨時座長として『震災救援事業』を開始、直ちに当日午後4時出帆の山城丸に賀川らは便乗、慰問調査に赴いている。同三日、それまでに寄せられた慰問品を携えて第二便が備後丸で後続している。－中略－この時の青年会（YMCA）の活動は、組織的なソーシャル・ワークへと青年会関係者を開眼させたことを、福山主事（神戸YMCA）の言葉の中に読み取ることができよう。

『救援の事業は終わらない。今後次いで起こりくる、困難なる事業に接して誰がその為に苦しむであらうか。私は祈る、社会的活動に最も相応しき立場に置かれたる青年会とその会員の諸兄が共にこの新しき時代の創建の為に立たれんことを。』」

（神戸とYMCA百年より）

震災救援部

天幕救護所

（場所）

- 神田美土代町／神田須田町／神田猿楽町
- 本所亀澤町／本所錦糸堀／本所松倉町
- 上野公園／岩崎公園
- 日比谷公園／芝離宮外／芝浦
- 神宮外苑
- 日暮里

（活動内容）

- 天幕を張る
- 飲料水の供給
- 人事相談
- 死傷者の応急保護（市依頼）

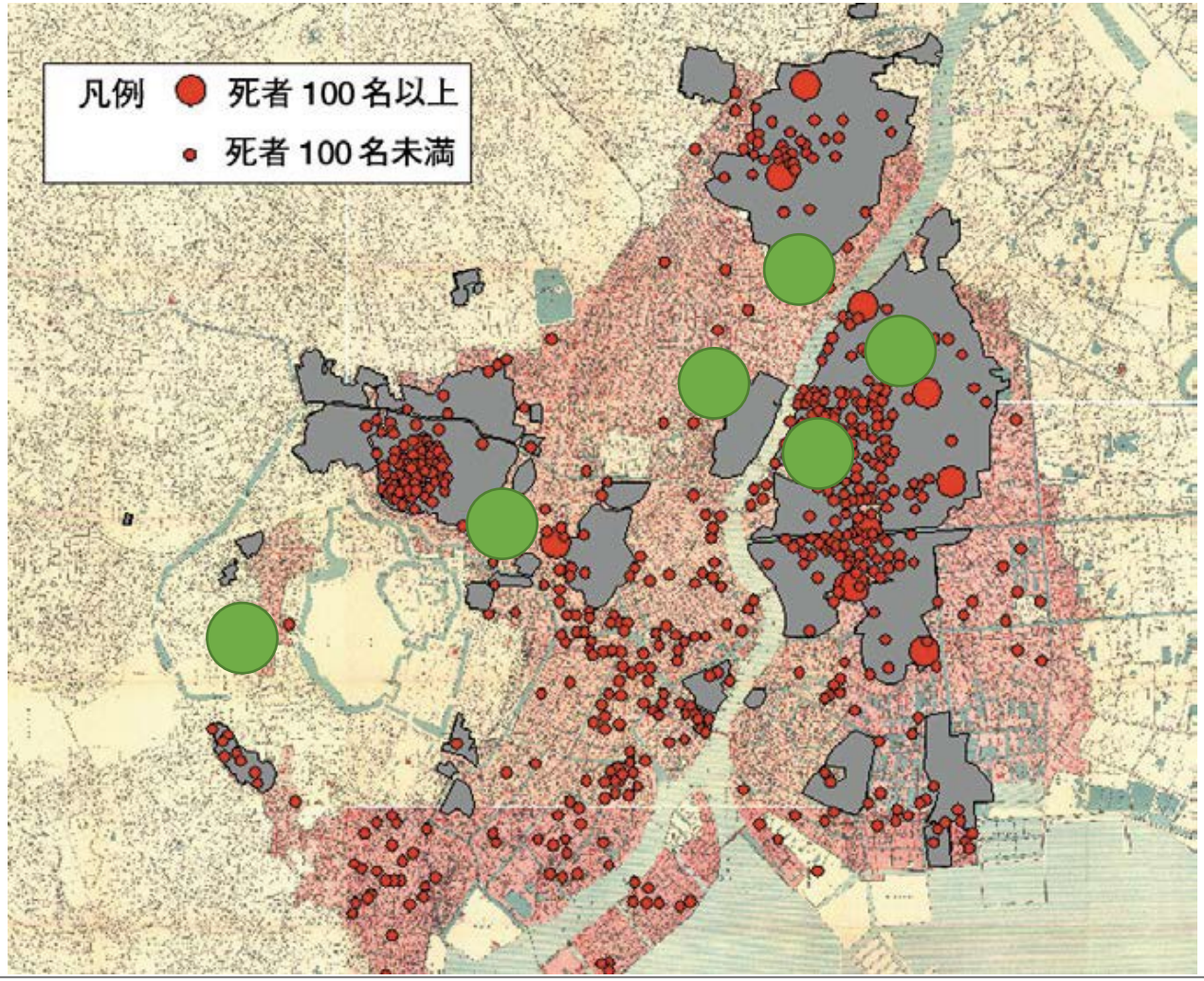
（場所）

- 本所被服廠跡付近
  （延焼が激しかった地域）

（活動内容）

- 天幕休憩所
- 救護
- 諸相談
- 椅子を設けて疲弊したる避難民の休憩所
- 茶湯の提供
- 郵便はがき・切手等用意
- →　郵便局に持参
- 尋ね人案内、立退所調査

天幕救護所



死者分布と９月1日17時の延焼範囲

ピンク色の範囲が最終的な焼失地域、
灰色の部分は、1日17時までの延焼範囲

出典：中村清二「大地震による東京火災調査報告」、竹内六蔵「大正12年９月大震火災による死傷者調査報告」：『震災予防調査会報告』第100号（戊）、震災予防調査会、1925年に基づき作成

天幕救護所

食料品衣類等の配給

- 時期

  9月3日から

- 内容

  生乳・練乳を配給

  玄米（５合／１人１日）

  後に、各救護所1日あたり

  生乳　　１石６斗（約250kg）

  練乳４８０缶

  衣類（特に幼老者）

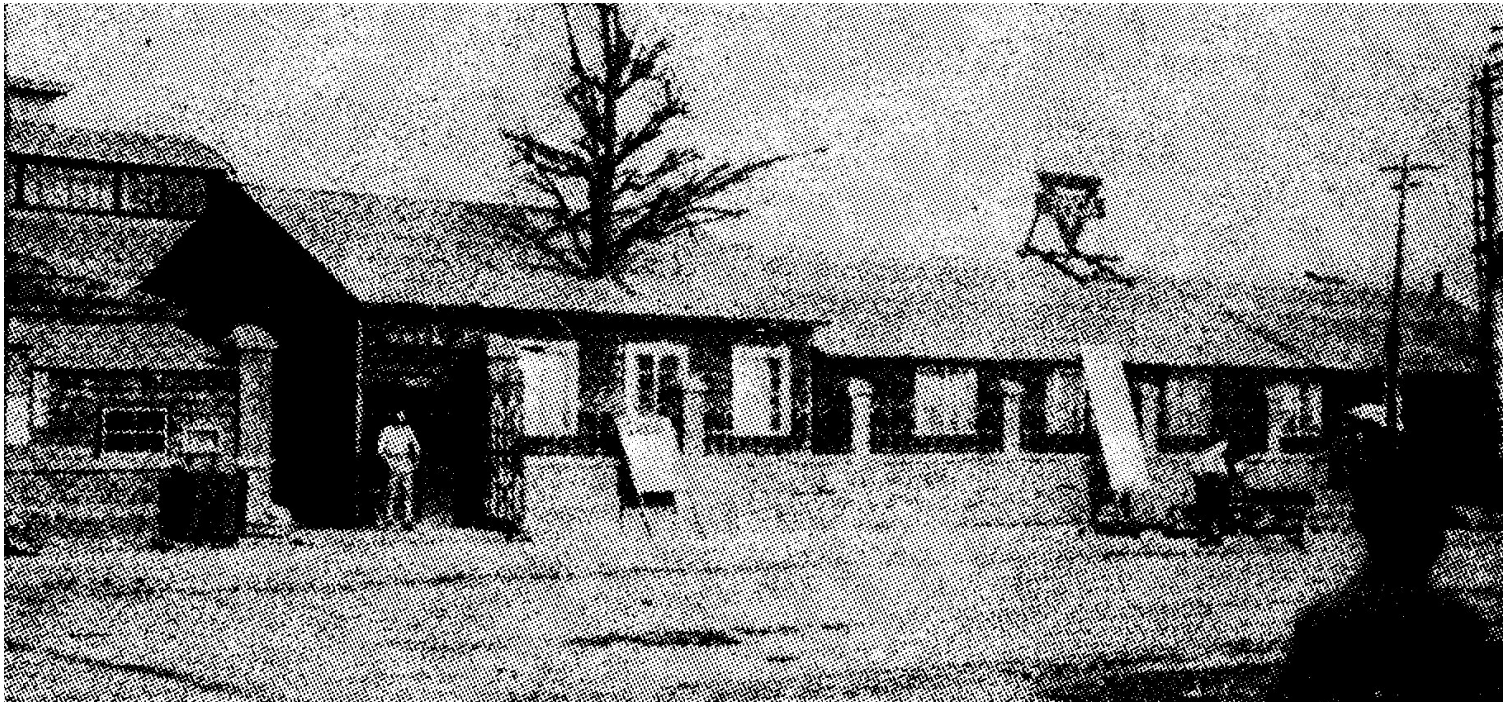
  蒲団

罹災民収容所①

- 拠点：東京YMCA体育館
  - （神田美土代町）

- ※東京YMCA体育館を応急修理して使用

罹災民収容所②



- 拠点：天幕救護所
（本所松倉町）

⇩

本所産業基督教青年会

児童収容所

- 時期　9月3日から
- 内容　生乳・練乳を配給
  玄米（５合／１人１日）

後に、各救護所1日あたり
生乳　１石６斗
練乳　４８０缶

衣類（特に幼老者）
蒲団

慰問事業　等

- 船内慰問

  芝浦～静岡　船内

  東京から地方へ避難者多数

  東海道線　沼津までは不通

  (背景)　戦地慰問事業

- 巡回慰問

  バラックを職員3人1組で巡回

  10月中は講談師が同行

- 日用必要品の提供

- 死傷者迷児等の捜索調査

  行方不明者の調査・捜査を行い、回答。

  調査依頼　約1万件　約1割は生存確認

- 職業紹介

  10月31日までに

  求人者　2,637人

  求職者　2,544名

  （背景）

  1891年から法人の事業として実施

露天伝道説教日曜学校

- 場所
  上野公園／日比谷公園／
  青山テント
  職員・学生部有志が伝道隊を組織して
  夜間伝道説教実施
  主に日曜学校協会が担ったか？

◇日比谷テント◇

「小供の家」附近バラック在住者の中小児の遊び場所　小国民の楽園

◇青山テント◇

- 慰問音楽会・演芸会、お伽會、講談会
- 小児の会もあり
- 商家の子弟・学生向けの英語の授業
- 日曜学校（平均出席21名）
- 夜間祈祷会（平均出席30名）
- 講演会（平均出席250名）

学生の罹災者調査

- 日時　1923年10月30日
- 学校数　大学・専門学校　23校
- 学生数　57,500人
  ＊多くの学生は休暇中
- 罹災学生総数　9,042人

（内訳）自宅焼失　2,145人
下宿焼失　4,221人
倒潰　66人
死者　57人
傷者　52人
要学資補給　1,111人

（背景）

1897年1月19日
全国学生基督教青年会同盟
（学生YMCA）成立
加盟青年会数　32

1915年　(日本)56　（朝鮮）10

1918年　大学令　制定（文科省）

1919年4月2日～5日
全国基督教青年会大会
東大YMCAにて
「青年奉仕運動」の展開
名誉主事マール・ディビスの貢献

青年会学生寄宿舎損害

- 麻布寄宿舎　焼失
- 帝大青年会寄宿舎　大破損
- 中野寄宿舎　破損
- 早稲田大学信愛学舎　破損

- 破損施設は応急修理をし罹災学生収容
- 教科書・参考書配布約6,000冊
- 文房具配布　若干

1912年東大YMCA会員

精神作興事業

- 精神作興に対するポスター作製

  30,000枚を東京・横浜の
  震災地に配布

市民大学

- 全国に講師（2人）派遣
  - 全国50都市
  - 講演回数　約100回
  - 参加者　延200,000人

  - 東京・横浜　講演
  - 10月1日～　3ヶ月
  - 1日1回～2回　開催
  - 参加者　不詳

賀川豊彦講演会

全体のまとめ

支援事業	開始	閉鎖または見込	実績	
テント救護慰問事業	9月2日	10月31日	約450,000人	
避難民輸送船内慰問	9月9日	9月末日	約5,000人	
児童収容所	9月2日	9月末日	80人	日曜学校協会児童保護所に引き継ぐ
罹災民収容所	9月20日	翌3月末日	370人	
食料品衣類配給	9月2日	12月末日	生乳816斗、練乳24,000瓶、衣類32,825点、蒲団1494枚　等	
巡回慰問	9月9日	10月末日		
職業紹介	9月9日	10月末日	求人数2,637人、求職数2,544人	東京YMCA職業紹介所に引き継ぐ
死傷者迷児調査	9月2日	10月末日	約10,000人	
少年慰問指導	9月11日	永久的事業の見込	約25,000人（2月末）	
学生及び商工青年救護事業	9月11日	永久的事業の見込		
精神作興事業	9月11日	永久的事業の見込	約200,000人	

経費	閉鎖までの経費	¥114,032.89	収入	寄付金	¥65,105.89
	救護継続事業費	¥301,439.00		所要資金	¥350,366.00

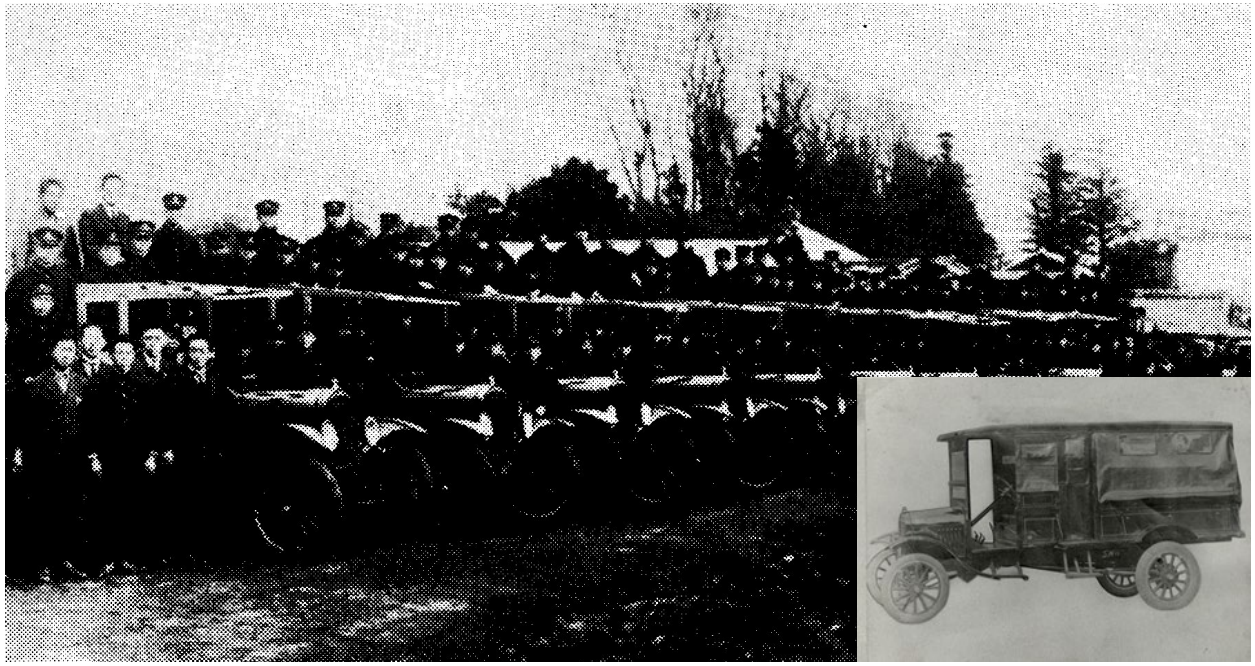
自動車教習所（1923年10月16日～）

市営バス運転手養成のため、目黒に自動車教習所をひらき200名の運転手を臨時養成

(背景)

元理事長　長尾半平
（元内務省鉄道員技師）

内務省経由でセールフレーザー社経由でフォードの車500台を購入。しかし運転士がいなかった。円太郎バスとして運用。



※円太郎バス

大正13年1月18日から巣鴨～東京駅間と中渋谷～東京駅間で運行を開始。当局の前身である東京市電気局が乗合自動車事業を開始するきっかけとなった車両であるとともに、関東大震災後の東京の復興を支えた車両。11人乗りワンマンカー。明治の落語家の橘家圓太郎が当時走っていた乗合馬車の物まねをしたことで、東京の乗合馬車に「円太郎馬車」という呼び名が付くようになった。その馬車に似ていたことから「円太郎（自動車）」と呼ばれた。（東京都HPより）

募金エピソード

山本邦之助氏
東京ＹＭＣＡ
第２代総主事
（在任　1905～23）

シリーズ
資料室の窓から〈116〉

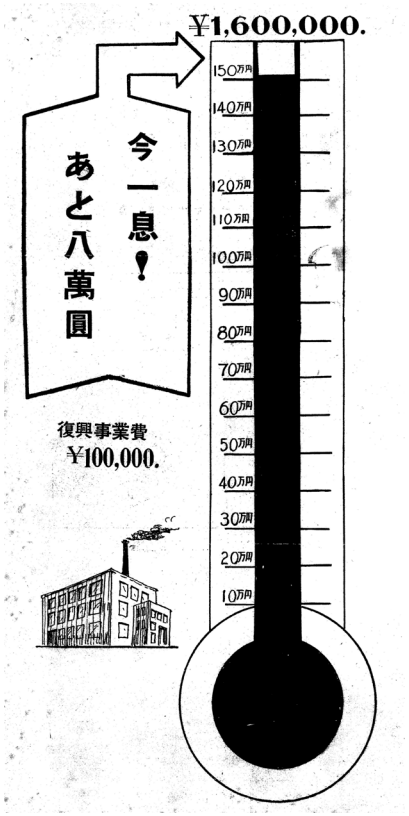
電文発信者“ヤマモト”
第２代総主事山本邦之助

本会元副総主事　**齊藤　實**

嘗て行った東京ＹＭＣＡでの最大規模の募金活動は、関東大震災からの復興建築資金募集であった。すべて寄付金で賄うもので総額１６０万円。物価比較で今なら４０００倍、約64億円である。募金趣意書には、予定を次のように書いていた。「モット博士ヲ通ジテ米国有志ヨリノ寄付金百万円。日本ニ於ケル募金額六十万円」と。震災発生の１９２３年９月１日の総主事は山本邦之助であった。山本は、東京高等商業学校（現一橋大学）で学び、日本郵船㈱に勤務中の１９０３年12月には東京ＹＭＣＡ理事に就任していた。１９０３年７月に日本ＹＭＣＡ同盟が発足している。

中略

震災直後、山本総主事は「外務省を通して米国ＹＭＣＡ同盟会長Ｊ・Ｒ・モット博士に救済品寄付方を電信で依頼した。この電報発信人たる青年会の山本の氏名が当時の外務大臣（正しくは、内閣総理大臣。齊藤實註）山本権兵衛と誤解せられ、モット博士は直ちに北米赤十字社に之を移牒せられた。米国赤十字社は…それから大活動を始めた。あとで北米赤十字社社長の談として直接我輩の聞いた所によると当時北米赤十字社募金の総額は１０００万ドルに達したとのことである。怪我の功名とか、山本の電文が間違って此大救済事業の因となったとは本人さへ知らぬ所、知る人ぞ知るである」と。電文発信者はまさしく「ヤマモト」であった。



新会館の建設

1925年5月3日
YMCA会館再建委員として北米Yから派遣

東京YMCA新会館（1929年～1992年）

本所基督教産業青年会①

＜経過＞

〇前身　東京YMCA江東支部
（1919年～21年）

〇発足　1923年10月19日

〇住所　本所区松倉町2丁目62番地
東京婦人矯風会の土地を貸与

〇1923年11月10日　バラック完成

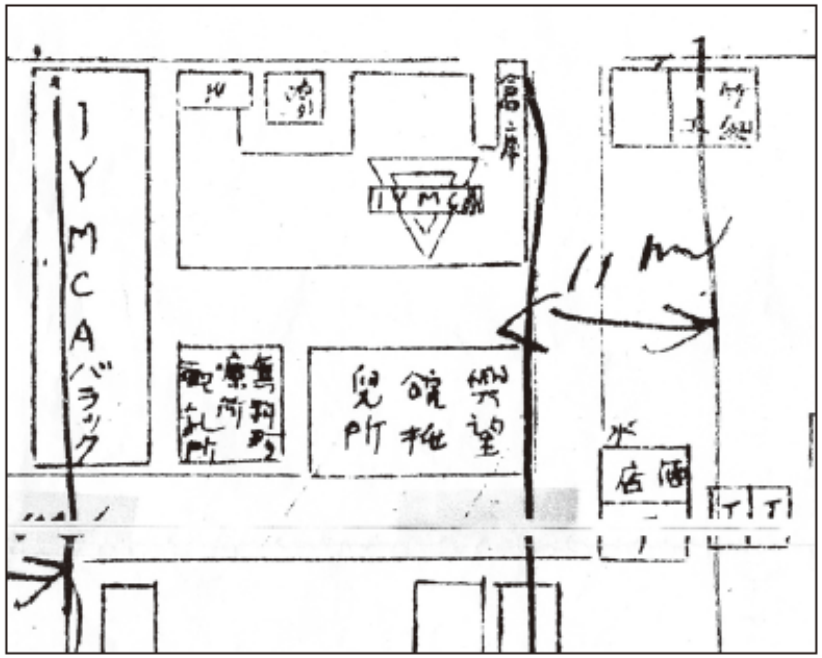
〇1924年2月19日
東京YMCAから独立

〇1928年4月
区画整理に伴い移転し、会館・附属建物を建設（15,000圓）

〇設立の経緯

- 地域一帯は工業団地
- 一時離散した労働者が回帰
- 居住環境の貧弱さ
- 応急救済事業は一段落
- 継続した救済が必要
- 将来のある青年労働者に「キリスト教精神」を伝えることは重要

本所基督教産業青年会②



○職員　全20数名

内　賀川豊彦氏関連　12名

東京Y職員　荒川哲次郎氏　他

○予算（1923年10/19～12月末）　7,669圓

内　賀川豊彦講演献金　約30%

○事業

宗教部／教育部／調査部／社会事業部／
無料診療所・児童健康相談所／牛乳配給所／
児童栄養食給与／体育部／低利事業資金貸金／
組合事業部／その他（無料宿泊・訪問看護　等）

▼興望館（1919年～）

▼雲柱社　光の国保育学校等

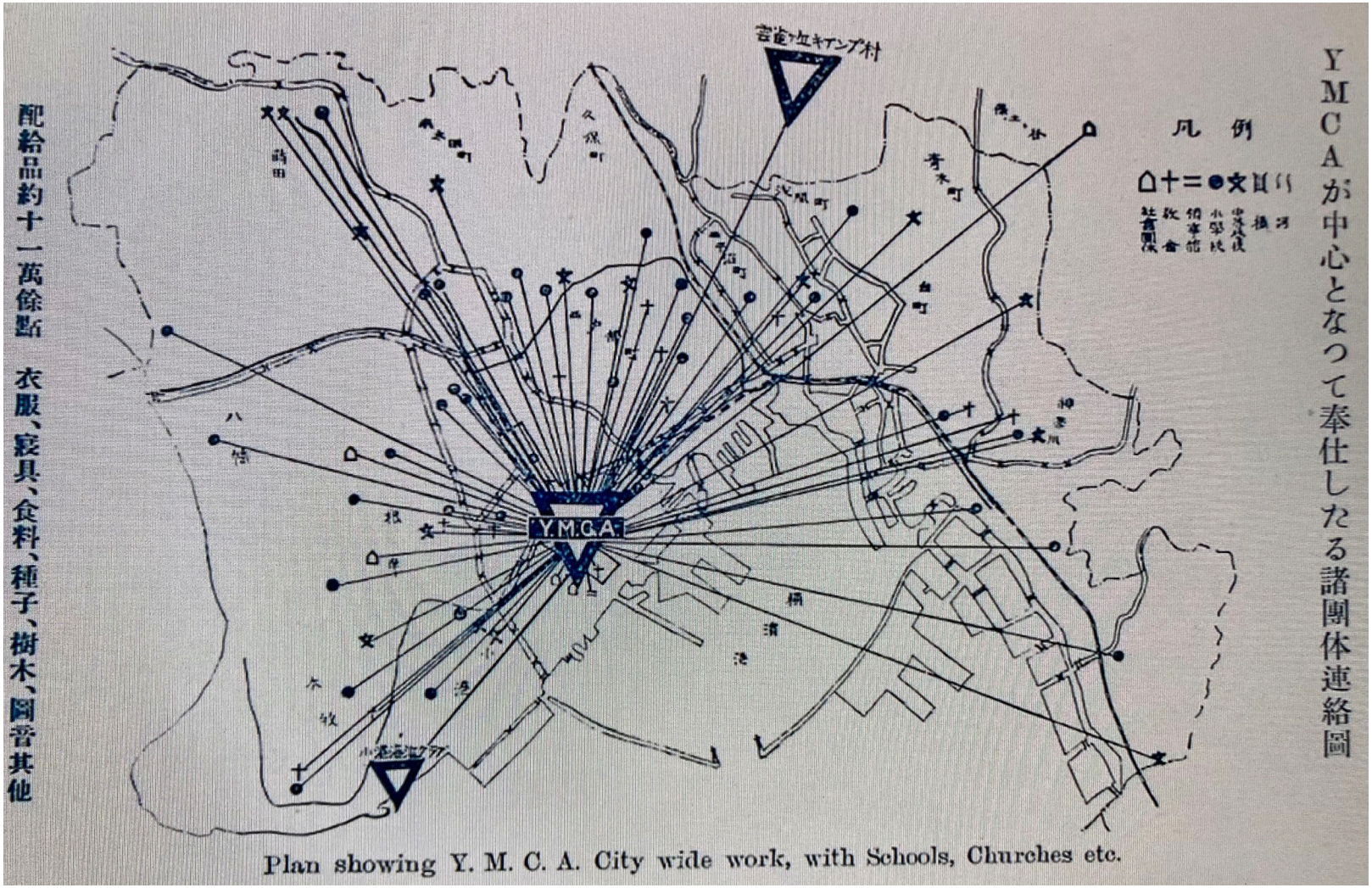
▼本所賀川記念館（1969年～）

▼日本キリスト教団東駒形教会

▼中ノ郷信用組合（1928年～）

▼東京医療生活協同組合
新渡戸記念中野総合病院
（1932年～）

横浜YMCA①


YMCAが中心となつて奉仕したる諸團体連絡圖
配給品約十一萬餘點　衣服、寢具、食料、種子、樹木、圖書其他
凡例
YMCA
Plan showing Y. M. C. A. City wide work, with Schools, Churches etc.

横浜YMCA②

飲料水給与数	3，384	道案内数	1，386
休憩者数	1，508	郵便差出取扱数	35，934
各種相談数	1，191		
無料理髪数	398	有料理髪数	96
巡回慰問数	3，686	慰問品数	1，515
牛乳配給数	642	牛乳配給量	1，115
私製ハガキ取次数	2，629	手紙代筆数	288
切手ハガキ取次数	3，158	シャベル貸出数	428
リアカー貸出数	140	ツルハシ貸出数	11
クワ貸出数	64	荷車貸出数	80
手荷物預数	104	相談等来訪者数	2，067
傷病者手当人数	204	喫茶店利用数	4，549
児童活動参加者数	2，000	会場奉仕人数	377

何故YMCAは復興支援を行うのか？

「日本基督教青年会(YMCA)同盟委員会は大正12年9月関東における大災害に際し各基督教青年会(YMCA)が率先協力して緊急救護の事業に力を盡（尽）くしたることは基督教青年会(YMCA)の根本精神本来の使命とに鑑みて誠に機宜を得たるものと認む。」

（「復興部週報」第壹号　1923年12月10日）

YMCAブランド

ひとりがよくなると　　世界はきっとこう変わる。
ひとりが「よくなる」と、どんなコトが起きるだろう。
ひとりが「よくなる」と、
その人と出会った誰かがうれしくなる。
つまり、その人もきっと「よくなる」。
そして「よくなる」の繰り返しは
社会や世界をよりよく変えていく
チカラになると思うのです。

その人と出会った誰かが「よくなる」
そんな出会いとつながりを
YMCAはこれからも大切にしたいと考えています。

「よくなる」の連鎖は
やがて社会や世界を変えていくチカラとなっていく。
そしてきっと平和を形にしていく原動力となっていく。

YMCA

みつかる。
つながる。
よくなっていく。